

# 朝鮮時代の歳画

井 本 英 一\*

李氏朝鮮（1392—1910）の歳時記の白眉とされる洪錫謨の『東国歳時記』（1849年、洪錫謨他『朝鮮歳時記』姜在彦訳注、東洋文庫、1971年）によると、正月元日に、国王に歳画を進上する行事があった。書画を掌る官署である凶画署では、道教の神々である寿星、仙女、直日神将の凶画を国王に進上し、その後、官人たちはこれを互いに贈り合った。その他に、長さが一丈余もある甲よろいを着けた2将軍像を画いて国王に進上した。1つは斧をもち、1つは旗旌をもち、これを宮門の両扉に掲げた。その他の鬼神の画像を門扉に掲げ、民間でもこれにならった（24頁）。民間では鶏虎図を壁に貼り、厄除けとした（26頁）。

洪錫謨は漢学者であったので、朝鮮の習俗の源流を中国の典籍に求めた。ことに、中国の6世紀の歳時記である宗懐の『荆楚歳時記』（守屋美都雄訳注、布目潮風他補訂、東洋文庫、1978年）と、それに引用された後漢のとうくん薫勛の『問礼俗』を引き、そこに起源を求めた（26頁）。

宗懐、前掲書に引く『問礼俗』にいう。正月1日を鶏となし、2日を犬となし、3日を羊となし、4日を豚となし、5日を牛となし、6日を馬となし、7日を人となし、曇りと晴れによって豊凶を占う。元旦、鶏を門に画き、7日、人像を帳とばりに帖る。今、1日は鶏を殺さず、2日は犬を殺さず、3日は羊を殺さず、4日は豚を殺さず、5日は牛を殺さず、6日は馬を殺さず、7日は刑を行わないのもこのためである。昔は鶏を門にはりつけにし、鬼を畏れ

---

\*本学文学部

キーワード：新年と歳画、動物と祖先、入口と壁、死と再生

しめたが、今は殺さない。どちらが正しいのか知らない。

正月7日早朝、門前に牛、羊、鶏を呼び、灰の上に粟と豆を置き、宅内に撒き、牛馬を招くという。その出典は知らない。……晋の宰相賈充の李夫人の『典戒』によると、正月7日、綵や金箔でつくった人形ひとがたを屏風に帖ったり頭に挿したりする。また、江北の人は、正月7日の人日に至るまで、旧年の野菜を食うのを忌み、その年の新菜のみを食う者がいる。楚の地方の人が、新年の鶏を絞めて食うのを忌むのと正反対である。また、余日には牛、羊、豚、犬、馬の像を刻まず、元日と7日の2日だけ、人と鶏の像をつくるが、その意味がはっきりしない、という。

18世紀朝鮮の金邁淳（1776—？）の『洸陽歳時記』は、18世紀のソウル（洸陽）の伝統行事を記述したもので、それによると、正月元旦、凶画署では、国王に歳画を進上する。金甲神将の像は宮殿の大門に貼り、神仙、鶏、虎の像は壁に貼る。国王は、これを戚臣や近臣たちにも賜わる（『朝鮮歳時記』186頁）。

『荆楚歳時記』の正月の条にいう。画鶏を門に貼り、土でつくった鶏を戸上に置き、桃板に2神の絵を画き、戸の左右に置く。2神は神茶しんたと鬱壘うつるいの神で、門神といわれる。さらに同書は諸書を引用し、鶏も桃も悪鬼を払うための護符であるとする（10—11頁）。

朝鮮でも中国でも、元旦に鶏の画を門扉や壁に掛けた。あるいは、鶏を絞めて入口に吊した。鶏は早朝に鳴いて、夜中に徘徊する邪鬼を退散させる。鶏を元旦に用いるのはそのためであると考えられなくもない。しかし、『荆楚歳時記』が伝える正月の動物の順序は、鶏の次は犬になっている。別の論考で論じたように、正月の動物のそれぞれは、7日の人日に至るまでの死者の魂の輪廻転生の姿である。

現在でも、チベットの仏教徒やインドとイランのゾロアスター教徒の間に残っている鳥葬では、死体を鳥に食べさせて、魂をあゝ世（天上）に運ばせる。ヘロドトスが伝えるように、古代イランでは、ゾロアスター教の祭司階級になったマゴス僧らは、死体を犬に食わせた。古代インドとイランには4

つ目の犬の伝承がある。4つ目の犬は、現今では人びとの記憶から消え去ったが、茶色の大きい眉毛が目のように見え、全体で四つ目に見えるまだらの犬のことである。インド・イランでは、両民族が分離する以前から、この種の犬は、死者をあの世に導いたり、あの世の入口にいたりした。ギリシア神話の英雄ヘラクレスが、あの世の入口にいるのを地上に連れ帰ったケルベロスという犬もこの種の犬で、ケルベロスというギリシア語は、まだらを表わす古代インドのサンスクリット語のシャルバラスと同系のことばである。ケルベロスは、首が2つあったので、目は4つあったことになる。2つの目はこの世に向き、2つの目はあの世に向いていた。

ゾロアスター教の武神であり道の神（境界神でもある）ウルスラグナ神は、サンスクリット語のヴリトラハンに対応するアヴェスタ語である。ヴリトラハンは、川や道をふさぐ竜の殺害者の意味で、インドラ（帝釈天）につく形容辞である。ゾロアスター教では、インドラは悪魔とされるので、その形容辞も悪魔とされるのかということそうではない。ゾロアスター教ではウルスラグナは勝利神として、ギリシア神話のヘラクレスとして崇拝される。

ヘラクレスは10頭の動物を征服する功業を立て不死を手に入れる。始めは次々に動物を殺してゆくが、最後はあの世の入口にいる4つ目のまだらの犬ケルベロスを地上に連れて帰る。ヘラクレスの神話は、古代ギリシアの成人式、葬式、即位式のような通過儀礼で演じられたと考えられる。古代イランのウルスラグナの儀礼も同じような通過儀礼で演じられた。こちらでは、ウルスラグナ神が最初は風の姿で現れ、そのあと牛、馬、猪などに変身し、途中で15歳の少年に変身し、さらに2、3の動物の形を経て、成人の戦士の姿になる。風は鳥を表わすので、風の姿とは鳥の姿のことである。ウルスラグナの変身では、途中でもワールガン鳥の姿になる。

古代エジプト王は30年ごとに即位式を新たに行った。この即位式はセド祭といい、ジェド柱という柱を立てた。残っている当時の絵によると、柱の頂上には巨大な二枚の羽根がついていた。羽根は翼を象徴した。ジェド柱はトテム・ポールであるらしく、柱の中央に<sup>フアラオ</sup>国王（の祖先）が顔を出しているも

のがある。カナダのブリティッシュ・コロンビアにいるトリンギット族やヘイダ族の間で見られるトーテム・ポールの頂上には巨大なサンダー・バードが止まっている。サンダー・バードは雷鳥の意で、この鳥が飛ぶと雷が鳴るといわれる。雷鳴や稲妻は、神や祖先霊の来訪とされたので、トーテム・ポールではこの鳥を最初にもってきたのである。鳥と犬が自然の掃除屋として、古くから人間の死体を処理したため、人間の魂が最初に移るのは鳥や犬と考えられたのであろう。

これらの鳥や犬のあとにつづく動物は、鳥や犬が死んだり殺されたりしたあとに、魂が移転する宿主であった。輪廻転生は、ただらと無原則につづくのではなく、前半部と後半部があった。前半は死の世界の儀礼、後半は再生の世界の儀礼であった。中間で一度、人間に再生し、その人間が後半の儀礼の中心になったり、その人間が死んで、後半部の最後で2度目に生まれ変わることによって儀礼が完了した。ことに鳥が魂の輪廻の最初に現れるのはこのためである。

韓国の文化には、先端に鳥が止まった杆で、シベリア文化ともつながりをもつ鳥杆というものがあり、村落の入口に、石積みの祭壇と共に見られた。鳥杆は日本の鳥居の原型で、鳥居は神域や仏域と俗界の境界に立つ。東南アジアの村落の入口には、2、3羽の鳥が横木に止まった鳥居型の門がある。これらの境界の表象は、かつては鳥が魂の運び手（プシュコポンポス）と考えられた時代の名残である。もう1つは犬である。『荆楚歳時記』で見た正月7日の人日までの動物の列では、鶏につぐのは犬である。その背景には、人間の魂が移転する最初期の宿主であるという伝承がある。中国の十二支の序列では、後半の馬、羊、猿、鶏、犬、豚のように、再生儀礼の最後尾に近いところに出てくる。これは、再生直前にも死後直後の宿主が出るという文化があったことを物語っている。

中国の歳時記では、人日まで鶏を殺さず、それ以下の動物も殺さず人も殺さない習俗があった。一方、鶏を殺して入口の柱や扉に磔して吊り下げる習俗があった。鶏は人肉を食べないが、身近に用意できる鳥として、第1に出

## 朝鮮時代の歳画

したのであろう。英国に残るメーデーの柱立ては、生ま木を伐り出して枝を払って電柱状にするが、柱のてっぺんには緑の枝葉を残しておく。メーポール（5月柱）は本来は、塚の上に立てられたトーテム・ポールで、柱には五色のテープを巻いてニシキヘビのような柱にする。蛇は塚の中から出てくる祖先で、エジプトのジェド柱から覗いている王の祖先と同じようなものである。柱の頂上の緑の枝葉は、鳥の翼を表わしたものである。

日本では、正月15日に斎の神の祭りに立てる左義長柱のてっぺんは鳥を据えた。鈴木牧史編撰・京山人百樹剛定『北越雪譜』（岡田武松校訂、岩波文庫、1978年）の2編卷之2にいう。この左義長柱は、さしわたし3間、高さ6、7尺の雪でつくった円い壇の上に立てた。壇には2個所に階段がついていた。人びとはこれを城と呼ぶ。ところで、壇の中央に杉の生ま木を立てて柱とし、正月飾りなどをこの柱に結びつけ、または積み上げて、注連繩しめをもって上から結びめぐらし蓑のようにし、かやを入れて形をつくる。てっぺんに、大根注連だいこんじめ（大根のように一方が太く、他方が細くなってゆく注連）を据え、その左右に開いた扇をつけて飛鳥の形をつくり上げる。壇上で儀式をしたあと、火をつけて焼き払った（242—3頁、244—5頁の「斎神祭事之図」）。

古代ギリシア語で、臍へそをオンファロスといった。でべその形をした岩をへそ石といい、世界各地で世界の中心として崇拜された。ギリシア神話では、デルフォイにあるへそ石には、1本の柱が立っており、柱の先に2羽の鳥が止まっていた。2羽の鳥は、2枚の巨大な羽（翼）で象徴されたかも知れない。伝説によると、世界の東西のはてにいる鳥が互いに中央に向かって飛来し、ぶつかったのがデルフォイのへそ石の場所であった。へそ石は、他の場所でも論じたように、死体の埋葬場所から発生したものである。埋蔵地につくられた土饅頭どまんじゅうがへそ石の原型で、英国のメーデーに立てる5月柱の根元の土饅頭も同類である。メーポールの先端の枝葉が翼にあたることは前述したとおりである。

極東の宮廷儀礼で用いられる翳さしばは、長柄の先に左右に巨大な羽をつけた形をしている。即位式や高貴な人物の葬式に用いられるが、これらの式が死と

再生の儀式であるために、鳥の羽が用いられたのである。翳をかざして、天皇に対する太陽光線の直射をさえぎったり、葬列の死体に同じことをするのは、翳のもう1つの使い方であった。本来は天皇や死者が再生するためにかざしたものだ。古代エジプト第六王朝メレルカ王のサッカーラにある墓の浮き彫りには、少年らが2組に分かれて綱引きをしている場面がある。それぞれの少年は、先に手形あるいは羽のついた棒を手にしている（J・B・プリチャード『写真による古代近東』第2版、プリンストン大学出版、1969年、217図）。手形は手当てということばがあるように、再生や治癒に用いられた。羽も再生を表わした。手形と羽には当時の世界では差異があったと思うが、今は区別がつかない。

人間は、12月の末日に死に、その魂は正月元旦、鶏の中に入った。元旦の鶏は死んで2日、犬の中に入った。以後、羊、豚、牛、馬の中に魂が輪廻し、7日に人間の中に入った。魂は人間に入ることによって、人間の姿をとるが、この人間も死んで、次の穀物にその魂が入る。魂はさらに輪廻して、2度目の再生を行い、それが正月の再生といわれるものである。人間は、古来、2度生まれるといわれたが、正月の行事でもこれが見られるのである。

のちになって、元日は鶏を殺さず、2日は犬を殺さず、3日は羊を殺さず、……、7日は人を殺さず、となったのであろう。6世紀中国には、すでに仏教が行われていたので、仏教の輪廻転生のほかに、中国特有の輪廻転生があり、はやくからその観念が失われたことを示している。十二支獣は、もとは前半部と後半部に分かれており、前半は死の儀礼を、後半は再生の儀礼を行うときの対象とされた。

十二支を表わす漢字は、それぞれ動物の意味をもたない。つまり、起源的には非漢文化に属したものが、殷の人びとによって受け継がれたのである。夏王朝が殷王朝以前に実在したとしたら、十二支は夏から受け継いだとも考えられる。その場合は、夏と殷は言語的には全く別系統の王朝であったことになる。しかし、夏殷周3代の呼称があつたり、3代の歴史、神話が同じ漢字で説明できたり、中国人が自国を華夏と呼ぶ伝統から見ると、夏と殷が別

系統の言語を用いていたとは考えにくい。近年、長江流域でいくつかの古代文明の遺跡が発見されている。これらの文明が黄河文明とは異なった言語の上に成立したと仮定したとき、十二支の源流はそちらに求めた方がよいのかも知れない。十二支の源流は、言語の点では古代西アジアのものではないので、言語上の起源は究明しがたい。

長江流域では、6世紀の『荆楚歳時記』が伝える前半部の動物の列が知られていた。この動物列には、十二支では後半の終りごろに出る鶏と犬が最初に出てくる。しかも後半部の動物は知られていない。正月7日の人日に殺される人は、通過儀礼において殺される人身御供と同じもので、儀礼を実修する者の他我（アルテル・エゴ）であり、輪廻する動物と同じ祖先霊であった。他我を殺してその力をわが身に受け、後半の再生儀礼に入ったのである。本来は人日は人が死ぬ日であり、その年最初の刑の執行日であった。この日も、他の日と同じように忌まれるようになり、死刑を執行しない日になった。

正月元日から毎日、鶏、犬、羊などを殺していったが、これらの動物の死体はどのように処理されたのであろうか。鶏が殺されると、その中にある魂は犬に移った。犬が殺されると、犬の中にある魂は羊に移った。魂は毎日動物の中を輪廻し、途中、一度人間に転生するが、その人間も殺され、小正月には人間として再生した。それぞれの動物や人間は祭壇で殺された。鶏から始めて、それぞれの動物は天帝に供えられ、儀式の参加者は、肉を与えられ、神人共食した。それぞれの動物が祭壇で供犠される時、動物の中の別のエネルギーが天帝を賦活したと考えられる。そのエネルギーは、祭りの祭加者をも賦活した。1つひとつの動物は祖先神で、人びとは神を殺すことによって、祭りの対象である神を賦活したのである。祖先神である動物は、祭られる神の他我（アルテル・エゴ）でもある。他我也次々と輪廻転生するのである。

ゾロアスター教は、いくつかの魂の存在を認めた。その1つにフラワシという魂がある。フラワシは、ゾロアスター教の聖書である『アヴェスタ』に用いられた古代イラン語の1つであるアヴェスタ語の形である。同時代、アケメネス王朝が用いた古代ペルシア語は、アヴェスタ語と同系の言語である

が、この言語ではフラワシのことをフラワルティといった。フラは「前方へ」を表わし、ワシ（ワルティ）は「進行」を表わす。そこで、フラワシ（フラワルティ）は「前進」を表わすことになる。英語の「前方へ」を表わすフォワードと同じ系統のことばである。ゾロアスター教神学では、フラワシという魂は、個人の生前から存在し、個人の誕生後は個人の肉体を宿主とし、個人の死後、肉体が鳥や犬に食われても、フラワシは朽ちることなく、他の新生児の肉体に入ってそこに宿る。古くは、フラワシは人間の死後、動物の中を転々と輪廻したにちがいない。フラワシとは、転々と輪廻する魂のことである。

韓国の文献には、中国にあった輪廻転生する動物の列は見られない。古墳の参道の左右には、人物や動物の石像が対になって見られるので、仏教的輪廻転生の思想、あるいは仏教思想に影響されないシャーマニズムの輪廻思想があったことは間違いない。遺体は、左右の動物の列の間を通過して墓室に葬られる。左右の人物や動物は、文官と武官、雄と雌のような対をなしている。これら一対の人物や動物は、奈良東大寺の南大門に立つ高さ八メートル余りの開口と閉口の仁王像と同じものである。それぞれの仁王像には、90センチばかりの巨大な片足わらじを奉納してある。左右の仁王は生と死を象徴し、2体で1体をなす。この仁王像の間を通過して大仏に参詣するのである。東大寺南大門の北側には、仏閣としては珍しいことであるが、1対の<sup>こまぬ</sup>狛犬が安置されている。参詣者はこの狛犬の間も通過する。

朝鮮時代、凶画署が元日に国王に進上した凶画に2つの神将凶があった。この画を戸の左右に貼った。この門神も死と生を象徴し、2神で1体をなしたと考えるべきものである。2神は中国の正月の門神である神荼と鬱壘に相当する。シンダとウツルイは本来の中国の神名ではない。生者を表わす中期イラン語のジンダ〜ジントゥと死者を表わすムルダ〜ムルトゥ／ウルトゥの対音と考えられる。中国でももっと古くから2体の門神が死と生を表わしたにもかかわらず、外来語でこれと呼んだことは、何らかの意味があったからにちがいない。神も王も、さらには大臣も庶民も、2つに割かれた人身の間



## 朝鮮時代の歳画

を通過することにより、祖霊や神のもつ霊的な力をわが身に移した。

神は毎年1回、御輿に乗って、2つの門神の変異体である左右の雄雌の柱でできた鳥居を通して神社から外に出てお旅をした。神は神界から見ると異界である人間の世界を巡行した。神にとっては冥界である人間世界を巡ったあと、神は2本の鳥居柱の間を通して社殿に帰還した。人間が地上につくられた黄泉の国である神社・仏寺に参詣し帰還するのは、黄泉帰りという。人間は神仏に触れることによってその霊気を浴び、死の状態から再生するのである。神や祖先霊にとっては、この世を訪れて帰還するのが黄泉帰りであった。神仏はこれによって活力を身につけた。神は黄泉から帰還する際に、<sup>ひと</sup>人身御供を必要とする場合があった。人身御供も神の他我で、他我を殺して神は自らを賦活した。

中国では正月7日にあやぎぬ（綵）あるいは紙を切って<sup>ひとがた</sup>人形（人勝）<sup>じんしょう</sup>をつくり、髪の毛にかざした。人形をかざした者は、それまでの6日間に輪廻した魂の入った人形を身につけたことになる。人形は再生儀礼に供犠される人身御供であった。中国神話の西王母も正月7日に人勝を頭にかざした。西王母の前生は鶏、犬、羊、豚などの動物で、誰か祖先のあるいは西王母自身の魂が輪廻して人日に一応、人の形をとったと考えられる。7日に再生した西王母は、その魂は八日には穀物に輪廻し、後述するように、13日あるいは14日まで植物の形で転生し、小正月に2度目の生を享けて再生した。

朝鮮時代の歳画は、鶏の歳画と虎の歳画を壁に貼った。鶏は『荆楚歳時記』の冒頭に出るが、虎は出てこない。十二支動物として、その前半に虎が出てくる。虎は19世紀には普通に見られる動物であったし、朝鮮文化を象徴するものであったので、歳画に用いられたのであろう。鶏も、新羅の発祥の地を鶏林とも始林とも称したので、それを歳画にする動機はあった。現在も、鶏は結婚式のような通過儀礼で用いられるので、始原の動物と見なされる。鶏は鳥の代表として、死者の魂を最初に宿すとされた。虎は、虎に食われた人の魂を宿すという伝承があった（井本英一『十二支動物の話〈子丑寅卯辰巳篇〉』「虎の話」法政大学出版局、1999年）。

朝鮮では、正月元旦に神将図は宮殿の大門に貼り、神仙図、鶏図、虎図は壁に貼った。中国の鶏と人勝（門神）は、朝鮮の鶏と神仙（神将、門神）に相当する。神仙は、魂が輪廻し終わった祖霊であるとも、輪廻転生しない祖霊であるとも考えられる。門扉と壁は同じものである。門は壁を欠いてそこを通路にしたもので、扉は通路を閉ざすときには閉めた。つまり、扉は壁と同じものである。中国の宮殿の入口を闕けつといい、天子の居所をも指す。日本語「みかど」は「御門」で、皇居の大門であり、天子の居所であり、天子そのものを意味した。オスマン・トルコ宮廷あるいは政府のことを「至高の門」といったり（英語ではザ・サブライム・ポルトといった）、古代エジプトの王のことをファラオ（大きな門）というのと通じることばである。

朝鮮時代、宮殿の大門に神仙や鶏や虎の歳画を貼った。祖霊を天子あるいは天子の居所の象徴である門扉に貼るのは、天子あるいは皇居を賦活することを意味した。宮門に貼る歳画のエネルギーは天子のもので、下賜された歳画は廷臣の家の門扉に貼られたが、それは廷臣の祖霊として彼らを賦活した。一般の庶民はそれに準じた。壁に祖霊像を貼ることで、祖先に外の異界から自由に宮城や居宅に出入りしてもらえると信じられた。イランやインドのゾロアスター教徒は、死体を家屋から出して郊外の沈黙の塔に運ぶとき、普段の出入口からは出さないで、部屋の壁を破って外に出す。この規定は、ゾロアスター教の聖書である『アヴェスタ』の「ヴェンディダード」にある。日本でも、死体を床の間と掛け軸のある部屋に安置し、外に出すときは掛け軸を外し、そこに穴を開けて運び出す習慣があった。掛け軸は、見せかけの扉であった。

中国の万里の長城の城壁の石垣を外し、死体を埋納した民話が残っている。かつては、壁の中に埋葬する習慣があったことが分かる。ロシアのクレムリン城の城壁には、帝政時代からソ連時代にわたって、国家に対して功績のあった人物の遺体が埋葬されてきた。レーニンの遺体だけは、城壁の前に建てられた廟に安置されている。長蛇の列をなす参詣者のためにとられた処置であろう。インドの藩王ラージャの遺体は、都城の門に安置され、都民が告別の参拝を

した。門扉と一体になった敷居は祭壇であった。遺体は天帝に供える供物であった。

夜間、扉を閉めるとき、左右の扉のうち、片方の扉の下にある舌を敷居の中央にある穴（へそ）の中に落として扉を固定し、もう一方の扉を揃えて<sup>かんぬき</sup>門をする。敷居上の凹みは祭壇の上にある凹みと同じもので、遺体を埋葬して長方形の土壇あるいは土饅頭<sup>どまんじゅう</sup>をつくったとき、上部にできる凹みが起源である。古くは入口（門）の敷居（祭壇）の下に遺体を埋葬した。宮門（の門柱）に貼った神将図は、宮門を守る守護神の観を呈するに至ったが、本来は天子の他我である祖先像であった。文明が発展して、門の敷居の下に天子の遺体を埋葬しなくても、聖なる境界であった。現在ではその意味は忘れられ、別の意味が付されているが、世界各地に敷居の聖性が残っている。敷居と一体になった扉には、敷居の下に埋葬された供犠の魂が宿っていることになる。古代の儀礼では天子をそのまま拝することはせず、宮殿の門を拝することによってそれに代えた。御門<sup>みかど</sup>は門であるばかりか、天子をも表わしたからである。

壁に歳画を貼るといふのは、その背後に壁のもつ聖性があったからである。一連の壁の欠けたところに通路を設け、門扉をつける。飛鳥時代、外国の使臣が皇居の門を拝んだのは、このような状況の下においてであった。祖先崇拝の伝統が残っている国々では、壁を拝むことが無意識に行われる。北半球でも南半球でも、北西つまり乾<sup>いぬい</sup>の方向は、祖霊が去来する方角とされた。日本の床の間と掛け軸の場所は前述したように死者が出てゆく仮の門である。この場所に神棚と仏壇を設ける。他の文化においても、一神教や多神教といった宗教や教派に関係なく壁を拝む習慣が残っている。宗教によっては、発祥地に向かって壁を拝む。宗教によっては、壁の前に祭壇を設け、祭壇に供物を載せて壁を拝む。いずれの場合も、壁に聖性があり、その聖性に対して礼拝するのである。壁の外が緑の芝生と樹木から成る庭園であろうと、自動車の駐車場であろうと、ごみの集積場であろうと、壁の聖性の強弱には変わりはない。

韓国の古俗にもあったと思うが、正月7日の人日まで、去年の野菜を食べないで、新菜のみを食べる者がいた。この事実は、小正月までの正月期間の前半部につきまとう禁忌と関係がありそうである。本来は、正月の前半部は死の儀礼にあてられたので、死の世界に属する去年の食材を用いてつくった食物を食べた。この食物は旧い年につくられ、その後は一切、熱を加えない冷い食物である。中国で、冬至後105日目に用意した、熱を加えない食物である寒食もこれにあたり、春の再生直前に食した死の世界の食べ物であった。同類は古代文明国に広く見られた。おせち料理がこれにあたる。

おせちの特徴は、熱をもたないことで、これは去年の火で調理されたものなので、新年に改火された新しい火で調理しなおすことはできなかった。おせちの第2の特徴は、蛋白質の食べ物が多いことである。魚類、鳥類、獣類の肉は、単なる栄養源ではなかった。輪廻転生する鳥獣は祖先神であることは前述したとおりであるが、前半部の儀礼では転生する鳥獣を殺して、神人共食することによって、神も人間もその肉のもつ力によって死から再生したのであった。餅は焼いたり煮たりする熱のある食物であるが、これも去年に用意するものであった。あの世からこの世を訪れてくる祖霊にとっては、この世は異界であり冥界であった。餅は祖霊の他我である鳥獣の心臓であった。祖霊たちは、この世の生者たちとおせち料理を共食して祖霊の国に帰っていった。生者が、この世につくった冥界である寺社を訪れ、食事をして帰るのと同じことなのである。

旧暦6月と12月の11日に、天皇は新嘗祭や神嘗祭を行う神嘉殿<sup>じんこんじき</sup>で神今食の儀式を行う。神嘉殿は宮中の皇霊殿の西側にある御殿で、ここで天皇は天照大神を祀り、火を改めて旧暦11月に用いた新穀ではなく、旧穀を用いて炊きあげた飯を自ら食する。新嘗祭（大嘗祭）は新穀を用いるので、旧穀を用いる神今食は死の儀礼に属する。

東大寺二月堂のお水取りは、死の儀礼を象徴する上七日<sup>じょうしちにち</sup>と再生の儀礼を象徴する下七日<sup>げしちにち</sup>に分かれる。12日夜から13日早暁2時頃にかけて汲む水が生命の水で、それまでに用いる水は死の水にあたる。旧い水や旧い穀物は、再生

## 朝鮮時代の歳画

儀礼の前半に用いられるべきであるのに、神今食は新嘗祭のおよそ3週間あとに行われる。神今食は旧12月11日に行うが、この旧暦は、立春正月にもとづいたものでなく、立春正月以前に行われた冬至正月にもとづいたものではなかったかと思われる。そうすれば、旧暦11月11日つまり旧い冬至正月暦の12月11日に死の儀礼が行われ、10日あるいは12日のうちに再生儀礼である新嘗祭を完了したことになり、一応の説明ができる。旧12月11日に行う神今食は、字義から推測すると、祖先の神々が今の世で食物を摂ることである。神今食は神々が主体であるので、死の世界を象徴する旧穀を用いる。改火するのは、この世の火を神の世界の忌み火に変えるためである。忌み火を使って調理するが、摂るときは温い食べ物ではないはずである。神道による葬式の食べ物は、一見、神今食の食べ物とは対極にあるように見えるが、両者ともあの世に属する忌みの食べ物であるので本来は寒食であった。旧12月の料理は1年最後に天皇が摂る食べ物で、旧11月の新嘗祭の米穀は新米を用いる。新嘗祭の食べ物は温いものを用意したが、神今食の食べ物は、主食の米飯ばかりでなく汁物、副食物すべてにわたって温い食べ物はないと考えられる。

正月が14日ないし15日つづく場合、前半7日と後半7日（8日）に分かれることは他の個所においても述べたとおりである。10世紀のイランの正月は10日つづいたが、前半部は人民の正月、後半部は王侯の正月と呼ばれた（アル・ベールーニー『諸国民の暦法』ザハウ訳）。日本では前半部は殿様の正月、後半部は百姓の正月と呼んだ。日本では小正月の喧騒を百姓に帰した命名かも知れない。日本の正月行事の1つに松の内がある。正月7日までを松の内とする地域と、15日までを松の内とする地域がある。めでたい松飾りであるので、小正月まで飾っておこうと思うのは人情である。一方、7日に取り外して小正月のとんどで、他の正月飾りその他といっしょに焼き払う。この場合、正月にあの世から帰ってきたご先祖さまに、煙に乗ってあの世に帰っていただくということになっていた。

正月行事が死と再生の儀礼であると考えれば、松飾りを外す正月7日が、前半の死の儀礼の終了日であると考えるのが自然である。松の木は依り代で、

正月1日に無数の祖先霊があの世界から群行して来訪し、鈴なりになって松に依りつく。7日に松を取り払って祖先に帰ってもらうのが古い型であった。祖先はこの世の子孫とおせち料理を共食し、活力をつけてあの世界に帰った。クリスマス・ツリーの電飾は近代のものであるが、冬至正月にこの世を訪れてくる祖霊の表象であった。イランでは新年その他の祭日に、街路樹に色とりどりの裸電球を灯す。この行事はイスラムの伝統ではなく、祖先崇拜の盛んであったゾロアスター教の遺習であろう。石田幹之助『増訂 長安の春』（榎一雄解説，東洋文庫，1967年）所収の「唐代風俗史抄」（1 元宵観燈）によると、長安で1月15日の小正月に行われたこの習俗は、イランから流入したもので、唐時代以前にはなかった風俗であるという。元宵観燈は字義どおり小正月の行事である。日本の盆行事の終わりの送り火と同じように、2週間の行事の最後に行われる。元宵の行事は、松の内が7日のほか15日まである風習と同じで、15日の行事は2次的なものであろう。

秋田市の8月6日前後に行われる竿燈は、10メートルほどの竹竿に9段の横竹を張り、それに40数個の提灯を吊し、三角形の山形をつくる。これを若者が肩や額に立てて練り歩く。竿燈は眠り流しとも悪魔払いともされ、七夕や盆の流し行事の一つとされる。8月（旧の7月）5日から7日にかけて行われる秋田の竿燈行事は、8月（旧の7月）15日の盆の前半部の終わりの行事ということになる。盆そのものも、15日間ずっと祖先祭祀がつづくわけではない。前半部の終わりに、祖霊たちは大挙してあの世界に帰ったのであろう。それが竿燈行事で、祖霊送りの行事であった。三角形の山形は、祖霊を祭る祭壇の表象である。秋田の竿燈は、クリスマス・ツリーの電飾と同じものであった。韓国の朝鮮時代の歳時記によると、4月8日の仏誕日には、仏寺や廟の境内にある老木に数多くの燈を吊す。この燈樹はクリスマス・ツリーと同じもので、神の子の出生に際して集まってきた祖霊を表象する。

朝鮮時代の歳時記には、鶏と虎の歳画は出るが、他の動物や植物の歳画は見られない。『荆楚歳時記』が引用する『問礼俗』に、正月7日の人日の朝、門前に牛、羊、鶏などの家畜を呼び、粟と豆を灰に載せて、これを邸内に撒

き、牛馬を招くが、その出所はつまびらかではないとある。『問礼俗』のいうところによると、7日になって、それまでの6日間の動物を門前に呼び集め、屋内に灰に混ぜた穀物を撒いて、牛馬を屋内に入れたらしい。人日以後には、中国では動物は出てこない。7日には、7種の野菜を用いてスープをつくった。これは、日本の七種粥と同じもので、その起源をなすものである。しかし、中国ではこの日、粟豆のような穀物を灰に混ぜて撒いたので、7日は穀物と深い関係があった。

日本の七種粥も人日に食した。そのほか、『延喜式』によると、大嘗会の解斎の粥は、米、粟、黍<sup>きび</sup>、稗<sup>ひえ</sup>子<sup>みの</sup>、藁子（ミノゴメという雑穀）、胡麻、小豆の7種の穀物を材料にしたものであった。大嘗祭で天皇の即位式を終えたあとの七種粥は、天皇の再生を祝う食べ物で、祭りの間は、天皇はまだ死の世界にあるとされた。そこで斎みの状態を解かれ、生の世界に入るためには、再生の食べ物を必要としたのである。日本では、7種の穀物を用いた粥は、正月15日に食した。正月7日は、中国と同じように、7種の野菜を用いた粥を食した。大嘗祭や正月15日の穀物の粥には、雑穀が入っていた。これらの雑穀は、宮中では日常は口にしないものである。このような粥は始原の食物で、最初期の食べ物を儀式の中に再生したものである。

正月7日の野菜を用いた七種粥についても同じことがいえる。10世紀から11世紀に書かれた清少納言の『枕草子』の開巻2段の正月の項によると、7日、雪の下の若菜つみをするが、若菜も青やかで、いつもは見なれていない御殿の奥にまでもてはやして騒ぎ立てるのもおもしろいとある。日本の春の七草は、後世の伝承によれば、せり、なずな、ごぎょう（ハハコグサ）、はこべら、仏の座（オオバコ）、すずな、すずしろ（大根）の7種で、殆どが野草である。七種粥も始原の食物であったので、御殿の奥では日常は口にしないものであった。そのために、もてはやされたのである。七種粥の古い型は、穀物粥であったと考えられるが、七草粥の風習が広がったので、正月7日は野菜の、15日は穀物の粥を食するようになったのであろう。別に、中国でも日本でも、正月15日の小正月には、小豆粥をつくる習慣があった。粥の

赤い汁を、両側の門柱の根元に注ぐ行事が中国の歳時記に出てくる。古く、供犠された人間や羊などの血を門柱に塗った習慣が小豆汁によってとって代わられたもので、正月の完了時にも、供犠が行われる文化があったことを物語る。

日本に限ったことではないが、正月飾りの盆栽には7種の植物を植える。松、竹、梅、南天、千両、万両、福寿草がそれである。盆栽の植物のそれぞれには、薬効があるかも知れないが、七種粥が本来もっていたような死と再生の儀礼に用いられたことには思い至らない。この盆栽は、古代西アジアに端を発し、ヨーロッパの各国にも用いられたアドーニスの庭の1つである。アドーニスの庭は、籠や壺に土を満たし、それぞれに小麦、大麦、ちしゃ、ういきょうその他の草花の種子を播いて発芽させる。この仕事はもっぱら女性の手によって行われた。それぞれの若い芽は8日あと、死せる穀霊アドーニスの像と共に海や泉に投棄された。J・G・フレイザーは、水中に投棄するのは、雨乞いのためであるとする（『金枝篇』第4部『アドーニス・アッティス・オシリス』第1巻、ロンドン、1914年、236頁）。

この行為は、死せる穀霊の復活のために行われた儀礼で、発芽の世話をする女性は大地の母神を象徴した。母神は、死せるわが子であるアドーニスを慟哭しながら水中に投じ、わが子が生命の水に漬って復活するのを待った。ヨーロッパの習俗で、収穫時に最後に刈り取った小麦の束に水をかけ、その束を農小屋にもって帰る農民にも水をかけるのは、刈り取りに際して、最後の束の中に逃げ込み、刈り取られて死んだ穀霊を再生させるためである。日本では、稲刈りのとき、最後に刈り取る稲束の中には稲魂<sup>いなだま</sup>が逃げ込んでいると信じられた。この稲束からとった<sup>もみ</sup>籾は、来年の種籾に混ぜて苗代に播いた。これで稲魂の永続が保たれた。

フレイザー、前掲書に興味深い事例がある。イタリアのシチリア島では、春と夏にアドーニスの庭を用意した。復活祭が近づくと、女たちは土を入れた皿に小麦、扁豆などの種子を播き、暗闇の中で2日ごとに水をかける。すぐに芽が出るが、茎を赤いリボンで束ね、復活祭3日前の聖金曜日に聖墓を



## 朝鮮時代の歳画

つくり、死せるキリストの像と共に皿を墓の上に安置する。日暮れになると、この死せるキリストの蠟人形が聖職者らによって街頭に引き出され、棺はレモン、バラ、ジャスミンで飾られ、号泣の中を行列は進む。キリスト像は再び教会に帰り、慟哭と断食が日曜の夜12時までつづく。このとき司教が現れ、キリストは復活したと宣言する。

西方教会では、復活祭は春分以後の満月のあとの日曜日に決められており、イエスが刑死した金曜日から3日目に復活したという伝承にもとづいている。復活祭は、このような設定の仕方になっているので、3月22日から4月25日の間のいずれかにくる移動祝日になっている。太陽暦を採用した西方教会に対し、メトン暦のような太陰太陽暦（いわゆる旧暦）によっていた東方教会では、復活祭は、ユダヤ人の過越節の日であるニサン月14日（満月の日）に行われた。ユダヤ暦は旧暦であったので、年初の月であるニサン月（太陽暦の3—4月）の14日は満月であった。15日は日曜でもあった。太陽暦を用いた西方教会では、満月と日曜が分離してしまった。

満月の日に復活する思想は、太陰暦あるいは太陰太陽暦（一括して旧暦）の15日の前夜14日から復活が完了することであった。極東と同じように、古代ヘブライの世界でも、古くは月始めは新月ではなく満月の日であった。復活が月始めの満月の日に完了したのか、月の半ばの満月の日に完了したのか断定しかねるが、新しい段階では、月始めは新月の日になったので、月が始まって2週間のちに再生が完了したことになる。復活祭では七種粥に類するものを食べたり、アドーニスの庭をつくる。それを海や川に投棄しないが、初春の再生儀礼であった。

奈良東大寺の二月堂で行われる修二会（お水取り）は、奈良時代の聖武天皇の御代から連綿とつづく行事である。修二会は現在3月1日から14日まで行われるが、旧暦では2月1日から14日まで行われた。14日が満願日であるが、釈迦の涅槃日である15日の行事で事実上お水取りは終わる。修二会は春分直前に終わるので、春を迎える再生儀礼であったことが分かる。旧暦の正月（太陽暦2月上旬の立春前後）を修するのが修正会でそのあと修二会がつ

づく。修二会は一方では修正会と呼ばれる。修二会は春分を正月とする文化にもとづいたものである。再生儀礼であったので、5日の実忠忌を含む上七日と、12日の生命の水を汲むお水取りの行事を含む下七日の2つの部分に分かれる。7日の夜半、厨子に入った小観音が大観音の前に出御する。これは、再生儀礼である修二会の後半部の始まりを意味する。前述したシチリア島の教会の復活祭を迎える行事では、アドーニスの庭、聖墓、死せるキリストの像、棺、号泣などのモチーフが見られたが、修二会の中には、これらのモチーフに当るものはほとんど見ることはできない。それでも、修二会と復活祭は初春の再生儀礼である。

アドーニスの庭を用意する文化には、動物の転生が一般に見られない。中世イランでは、アル・ベールーニーの伝えるところによると、春分新年が近づくと、高さ60センチ、径30センチほどの切り株状のものを7つ土でつくり、それぞれの土の株（土壇）に小麦、大麦、その他7種の穀物その他の種子を播き、発芽させる。1月12日、小正月が終わると共に、若苗は投棄され、本来は祭壇であった土壇は破壊されて地面に撒かれた。エジプトでも19世紀まで、同じような土壇をつくり、その上に穀物その他を発芽させた。正月の終わりに、発芽した苗をナイル川に投じ、同時に村の若い女性を供犠した。古代中国では、15日の正月行事が前半と後半の2部に分かれ、7日の人日には人間が再生すると同時に、その人間の他我が殺された。15日に、2度目の誕生をする。

アドーニスの庭に植えられた7種の穀物、樹木、野菜、草花を見てきた。これらのものが人間の再生儀礼に用いられたことは分かったが、人間の魂がこれらの植物の間を輪廻転生する伝承はない。アドーニスの庭を用意する前の動物の転生も見られない。鳥獣も植物もトーテムとされたが、植物トーテムの観念は、はやくから消えてしまい、動物トーテムのそれだけが残ったようである。古代エジプトにも土壇をつくってそれに穀物その他の種子を撒き、成長させる儀礼があったと考えられる。それと併行して鳥獣をトーテムとする伝承があった。

## Votive Pictures of Old Korea

Eiichi IMOTO

In 19th-century Korea votive pictures of a tiger or a cock were put on the door or the wall of the imperial palace on the New year's Day.

Pictures of a god and a goddess were also put on both the door posts or the entrance to the palace.

These animals and gods were the ancestors of the emperor, whence the guardians of the palace.

This custom was borrowed from China. In China there was more detailed systems of animals through which the souls of the dead were transmigrated.

It was believed that the souls of the dead went into the wall and appeared out of it.

People buried the dead body in the wall. The dead, like the living, come to life again on the New year's Day. The votive pictures of the New year's Day were the pictures of the ancestors of the emperor.